

氏 名 今中 崇文

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1809 号

学位授与の日付 平成28年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 都市回族コミュニティの維持と宗教実践
—中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究—

論文審査委員 主 査 教授 塚田 誠之
教授 横山 廣子
准教授 山中 由里子
教授 西澤 治彦 武蔵大学
教授 松本 ますみ 室蘭工業大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本論文の目的は、中華人民共和国陝西省西安市の回族が、非イスラーム国家である中国において、どのようにして周囲に暮らす漢族をはじめとする非ムスリムと共存しながら、イスラームの信仰とそれに基づいた生活習慣を維持してきたかを、その独特なコミュニティで営まれる宗教実践に焦点を当てて、民族誌的記述から明らかにしようとするものである。

そもそも回族は、周囲に暮らす漢族と共通する言語（漢語）を話し、容貌も漢族に相似しておりながら、イスラームを信仰し、それに基づく生活習慣を維持していることから、少数民族として認定されている人々である。中国全土に散らばって住み、各地で「清真寺」と呼ばれる宗教施設（モスク）を中心に集まり、「教坊」などと呼ばれる独特なコミュニティを形成して暮らしている。

中華人民共和国の成立に伴う各種社会主義政策の推進や近年の急激な経済成長に伴う都市の近代化は、回族の独特なコミュニティの存在をゆるがし、回族の脱宗教化や世俗化を進めているといわれる。漢族との混住の進行、人々を企業や機関、団体に所属させる「単位制」の推進、都市再開発に伴う住居や清真寺の強制移転などにより各地の回族コミュニティが弱体化、もしくは消滅しているという報告が相次いでいる。しかしながら、そもそも都市部に暮らす回族は、それ以前から、礼拝などの宗教実践への参加者も多くなく、信仰への意識が高くないといわれていた。そのような都市部の回族であってもなお、清真寺を中心とするコミュニティへの帰属意識を維持していたのはどのような理由があったのであろうか。本論文はとくに、このコミュニティへの帰属意識に注目し、清真寺とその周辺で営まれる宗教実践を多面的に考察することにより、その帰属意識を維持する仕組みについて解明しようとするものである。

本論文では、第1章と第2章において、西安回族の持つ、個別のコミュニティへの帰属意識にとどまらない、多様で重層的なローカル・アイデンティティについて取り上げた。そして、そのローカル・アイデンティティが、西安という都市の歴史的展開とともに形成されてきたことを明らかにした。その中でも、市中心部に存在する、複数の回族コミュニティを含む大規模な回族集住地域である「回坊」を取り上げ、そこ全体が西安回族にとって自由に信仰を営める空間であるという認識は共有されながらも、日常的にはそれぞれの清真寺を中心とするコミュニティを単位として活動していることを指摘した。

続く第3章では、西安市の中核的な清真寺である、化覺巷清真大寺（以下、清真大寺と略す）を取り上げ、教坊の中心となる清真寺がどのようにして管理運営されているのか、制度の歴史的変遷も踏まえて明らかにした。文化大革命による閉鎖の後、政府とのつながりも深い宗教職能者（アホンという）によって復興された清真大寺は、観光地として開放され、その運営は政治的にも経済的にも極めて安定している。その管理運営制度は、復興を果たしたアホンを中心に、複数の地元出身アホンによって担われている。本来、アホンは流動性の高い人々であるが、清真大寺のアホンはほとんど移動せず、地元に着した存在であることが指摘できる。

第4章と第5章では、清真寺での宗教実践とそこに集まる人々を事例として、清真大寺に帰属意識を持つコミュニティ・メンバーについて検討した。ムスリムにとって義務とされる宗教実践、とくに1日5回の礼拝と金曜礼拝の参与観察から、清真大寺は地域の中核

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

的な清真寺として、第一義的に、広くムスリム全体に対して開放されている一方で、この清真大寺に特別の帰属意識を有するコミュニティ・メンバーの存在が明らかになった。礼拝への参加者は、高齢者が多く、職業的にも、すでに退職しているか、自営業者などの時間に比較的余裕がある人々が多数を占めている。そこからは、若いうちは仕事に専念して礼拝に参加できなくても仕方がないが、時間に余裕ができてから信仰に専念すればよいという意識がうかがわれた。また、参加者の居住地から、必ずしも近隣に住んでいる者ばかりではなく、転居しても、転居前の地域の清真寺との関係を維持する傾向が確認された。しかし、転居にともなって2つの清真寺に帰属意識を持つ者も存在し、清真寺とコミュニティ・メンバーとの関係は永劫不変ではなく、柔軟性や可変性も観察された。

第6章では、西安回族の人生儀礼を事例として、コミュニティ・メンバーの清真寺への帰属意識がどのようにして維持されているかを検討した。西安回族の人生儀礼は、ほとんどの場合、コミュニティ・メンバーの自宅において営まれるが、そこには往々にして自分が帰属意識を持つ清真寺からアホンを招いている。これによって、民族内婚を繰り返し、きわめて錯綜した複雑な親族関係を把握し、たとえ居住地が清真寺から離れていても、清真寺との帰属意識を確認・継承することを可能としている。ただし、葬送については、清真寺で営まれ、コミュニティ全体に参加が呼びかけられる。自宅で営まれる追悼を目的とした「過乜貼(グオニエティエ)」についてもコミュニティ全体への参加の呼びかけは同様で、これらの儀礼を通じて、できるだけ多くの人々に死後の安寧を願ってもらい、来世での復活を果たそうという西安回族の願いが特定の清真寺への帰属意識を維持させる大きな要因になっていることを指摘した。

さらに第7章では、西安回族の年中行事を事例として、個別のコミュニティを越えて存在する、西安回族の多様で重層的なローカル・アイデンティティが維持される仕組みを明らかにした。その際、西安回族の年中行事を、①ヒジュラ暦にのっとって行われる年中行事、②旧暦にのっとって行われる年中行事、の2つに分類し、それぞれに分析を加えていった。その結果、いずれもムスリムとしてのアイデンティティを維持する役割を持ちながら、①の年中行事は、どうしてもおろそかになりがちな日常的な宗教実践を補うものとして特定の清真寺への帰属意識を、②については、西安回族の歴史的記憶を継承し、互いの交流を通じて西安に暮らす回族アイデンティティを維持することにつながっていると結論づけた。

これらの分析から、西安回族の清真寺を中心とするコミュニティは、以下のような仕組みで維持されていると考えられる。ムスリムとして死を迎える場としての清真寺、そしてムスリムとして送ってくれる同胞たちを必要とする意識とそれに基づいて繰り返し営まれる過乜貼がコミュニティ・メンバーの清真寺への帰属意識を維持させ、それがコミュニティを維持する内的要因となっている。一方で、イスラームの先賢たちを追悼する年中行事によって共有・継承される西安回族としての歴史的記憶が、コミュニティを越えたつながりを維持し、西安回族としての一体性を生み、国家権力や周囲に暮らす圧倒的多数の漢族に対抗することを可能としてきた。そして、これらの儀礼において重要な役割を果たしているアホンに報酬として「乜貼」が渡されることによって、アホンたちの生活が支えられ、コミュニティの中心である清真寺の維持にもつながっているのである。

博士論文の審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、多数者の漢族らと隣接する都市空間で生活する中国西安市の回族、とくにふるくから居住するカディーム派の人々が、いかにイスラームの信仰とそれに基づく生活習慣を維持し、ムスリムであり続けてきたか、「清真寺」と呼ばれるモスクを中心とする回族のコミュニティである「教坊」で展開する宗教実践に着目し、民族誌的研究を通して解明したものである。人々の帰属意識がどこに向けられ、どのような仕組みを通して保持されるか、またカディーム派以外の回族も多数、存在するなかで、重層的なローカル・アイデンティティがどのように発現し、人びとの言動をかたちづくるかを考察している。

本論文は、序章、1－7章、終章の計9章から成っている。

序章では、論文の目的と意義について、論文の問題意識、先行研究の動向や調査地の概況を示している。

第1章では、西安回族社会の歴史を概観し、唐代の外来ムスリムに遡るその起源に関する諸説を紹介した上で、明代において清真寺の建立とともにその周辺に回族コミュニティが形成される過程を明らかにした。くわえて、清末から中華民国期にかけて人口の移動や新たな思想の伝来などを経て、教派・出身地等において多様なローカル・アイデンティティが生まれた経緯を検討している。

第2章では、西安における大規模な回族集住地域「回坊」（清真寺を中心とするコミュニティ「教坊」の集合体）が回族にとってどのような空間であると認識され、それがどのように機能しているかを検討している。政府による都市再開発、景観の保護や統一の政策も論じられる。

第3章では、回族コミュニティの中心としての清真寺がどのように管理運営されているか化覚巷清真大寺を事例として描写する。歴史的変遷にもふれつつ、政府によるアホン（教長）の任命や育成、清真大寺民管理委員会の結成についても、他の清真寺との関係やそれとの比較に目配りしつつ詳述するなかで、化覚巷清真大寺の特殊性とそこを中心とする西安のカディーム派のアホンの供給・配置状況が明らかにされる。

第4章では、清真大寺で行われる日常的な宗教実践を通して回族の人々のコミュニティへの帰属意識について検討している。日々の礼拝や金曜礼拝などの日常的な礼拝、ラマダーン月の断食、マッカ巡礼を果たす前後など、ムスリムの義務とされる宗教行為の実践における西安独自の特徴を浮かび上がらせている。ザカート、乜貼（ニエティエ）などの喜捨、さらにアホンを招いて故人の追悼をしたり、個人の願望を叶えた際の会食である「過乜貼（グオ・ニエティエ）」の実践がなされていることも示されている。

第5章では、清真寺に集うコミュニティ・メンバーがどのような人々か、信徒の居住地域、清真大寺における宗教教育の学習班、宗教活動にとくに熱心な讚聖団の状況について考察している。清真寺からの居住地の遠近がコミュニティの強弱とは無関係なこともここで示されている。

第6章では、さまざまな人生儀礼の場面に着目し、イスラームの信仰と関わる内容や人々と特定の清真寺との関係を検討している。子供の誕生と成長、結婚、葬送について観察に基づく実態が示されている。ムスリムにとって重要とされる儀礼は、必ず清真寺からアホンを招いて行われるが、そのことが西安回族にムスリムとしてのアイデンティティと特定の清真寺への帰属意識を維持させることに重要な役割を果たしていることが指摘されている。

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

第7章では、清真寺を中心とするコミュニティを越えた重層的なローカル・アイデンティティがどのように維持されているのか、ヒジュラ暦にのっとり行われる断食明けの祭、犠牲祭等、および旧暦にのっとり行われる聖紀、5月17日の乜貼等、さまざまな年中行事を通して考察している。そのうえで、それらにムスリムとしてのアイデンティティだけでなく、特定の清真寺への帰属意識を維持する機能があること、さらに、複数の清真寺が連動して交流をし、交流を通じて西安に暮らす回族としてのアイデンティティを共有し維持することにつながっていることを指摘している。

終章では、全体の論点を整理するとともに、最後に西安回族のコミュニティがどのようにして維持されているのか改めて論述する。さまざまな人生儀礼や年中行事、さらには過乜貼の際のような、アホンがコミュニティ・メンバーを訪れる形式を通して西安回族にムスリムとしてのアイデンティティと清真寺への帰属意識が維持されてきたこと、さらに先賢や殉難者を追悼する行事としての歴史的記憶の共有と継承がムスリムとしてのアイデンティティを再確認するとともに、絶対的少数者ながらも西安回族としての一体性を生み、自らのコミュニティを守ることを可能にしたことを示している。

本論文は次の諸点において学術的価値を有する。

1. 西安の地理的位置に由来する、新しい宗教改革運動から生まれた教派と老教であるカディーム派との混在、さらに長い歴史に由来する住民と省外から20世紀前半に移住した人びととの共存、といった西安ならではの回族社会を描いたうえで、詳細に年中行事のあり方を観察・分析して、回族内部で重層的なローカル・アイデンティティが相互に作用し、対立と同時に一体性をも生み出している状況を指摘した点は、従来の回族研究にはなかった独創性が認められる。

2. 日頃、宗教活動との関わりを持つことの少ない都市住民の回族でも、人生儀礼におけるアホンの役割を媒介として、特定の清真寺とのつながりが維持され、葬礼を頂点とする形で回族としての意識やアイデンティティが維持される仕組みを解明した。ムスリム性の弱体化やインターネット・コミュニティとしての存続さえ議論されている都市の回族研究において、今後の推移を比較研究していく際の着目点を提示した。

3. 外国人研究者による調査研究に困難や制約が多い中国の回族の研究において、西安の著名な清真寺を中心とする回族コミュニティと長期にわたり良好な関係を維持しつつ、詳細な調査を行い、従来の回族研究では不鮮明であった諸点について民族誌的把握をしたうえで、それに基づく分析を行った。それゆえ、アホンらの組織の歴史的変遷、乜貼の実態、西安の異なる教派間の関係や連帯等、従来の回族研究では十分にとりあげられなかった事象や視点を提示している。

4. ムスリムとしてのアイデンティティを支える要点の一つとして、アホンによる宗教儀礼とアホンに対する乜貼・過乜貼の実践が非常に重要であること、さまざまな人生儀礼において過乜貼を行う点が注目されることを明らかにした。この点は中国の回族の研究において重要と思われるが、従来あまり研究されてこなかった。本論文は、多数の事例によって、それが注目すべき切り口であることを示した。

他方、本論文には若干の課題も残されている。過乜貼に関して漢族に周囲を囲まれてその多大な影響を受けてきたこととの関連性の有無、ジェンダーの観点、中国の外のイスラム世界とのつながりに関するより深い分析等である。しかしながら、これらの課題は、今後、研究をより深く掘り下げ広く発展させていく際に追求すべきであり、本論文の学術的意義と貴重な資料的価値を損なうものではない。

以上のように、西安回族の宗教実践を広い視野から細かく観察し、そのコミュニティの実

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

態を丁寧に描き出した本論文は、従前の研究にはなかった学術的意義を有しており、博士の学位を授与するに値すると、審査委員は全員一致で判断した。